女子美

No.164/2009

2P 2010年　女子美が新しく生まれ変わります
4P 桃井かおり客員教授　特別講義報告
7P 大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ2009　レポート
8P ヴェネチア･ビエンナーレ　南嶌教授インタビュー
10P 山本耀司客員教授　特別講義報告
12P 協定海外留学レポート
13P 大学院生が豪・ブリスベンで制作・展覧会開催
14P「女子美キャリア★カーニバル2009」レポート
17P 美術教育フォーラム2009開催　他
18P 美術監督　桑島十和子さん　特別講演会
19P「女子美短大ゴッホクラブ」結成　他
20P 退職教員からのメッセージ　他
21P 女子美アートミュージアム展覧会情報
22P「ヴァンジ彫刻庭園美術館」で特別講義を実施　他

女子美術大学広報誌

NEWS 1

2010年4月、芸術学部は学科構成を再編 短期大学部はカリキュラムを一新

創立110年を迎える2010年度より、現代社会のあり方やニーズを見据え、社会に求められる人材を育てるべく組織を一部改編いたします。現在、社会の中でのアートやデザインは既存の枠組みを超えて広がり、また様々なジャンルがクロスオーバーしています。本学ではこれまでの7学科2専攻を3学科12専攻に再編することで、各専攻の専門性を4年間を通して深めながらも学科内で隣接する領域を横断的に学びやすくし、応用力のある人材を育成します。従来、芸術学部は相模原キャンパスで開講しておりましたが、組織の改編にともない、芸術学部のアート・デザイン表現学科は杉並キャンパスに開講いたします。（※2009年7月2日、芸術学部の収容定員の増加に係る学則変更が認可されました。）

なお、2009年4月までに入学された在学生については従来通

芸術学部

美術学科（相模原キャンパス）

4年制・200名

従来の枠組みを超えて広がる現代の美術に対応して、専門分野での制作・研究に加え「平面」「立体」「芸術理論」を横断的に学ぶカリキュラムに再編します。アートの現場で活躍できる人材を育てます。

洋画専攻

絵画を基本に発想を表現にまで高め、独創的制作へとつなげます。基礎として画面構成、空間表現、描画法などを習得したのち、2年次から絵画と版画のコースに分かれ、平面・ミクストメディア・映像表現、版画の制作による表現を専門的に追究します。

日本画専攻

伝統を基にした革新的な日本画の創作を行います。古典作品の模写の研究とともに伝統技法については専門の講師を招き、表具・表装、筆、箔・切金実習、紙漉き、造粒法・粉砕法による岩絵具の実験製造を学びます。

立体アート専攻

彫刻という枠を超え、粘土・紙・木・石・金属という素材についての知識や技法を身につけ、その特性を生かした作品制作を行います。3年次から各自の表現にあった素材（コース）に分かれて専門技術を高め独自な造形を探究します。

芸術表象専攻

現代アートの理論と実践を学びます。現代アートの制作やプロジェクト、それに関わる理論、また、芸術理論の基になる美学・美術史の探究を行います。3 年次からは最前線で活躍する教員とともに、複数のテーマについて柔軟かつ横断的に探究します。

デザイン・工芸学科（相模原キャンパス）

4年制・230名

「ヴィジュアル」「プロダクト」「環境」「工芸」の4分野に分かれて学びます。1年次はデザインと工芸の基礎となる企画・プレゼンテーションの手法や工芸素材について幅広く学び、新しいデザインと時代に即応した工芸の可能性を探ります。

ヴィジュアルデザイン専攻

日常生活をとりまく社会の中からテーマを考え、広告、写真、CM、Web、アニメなどの企画制作といったトータルアートディレクションを学びます。基礎から専門的な各デザインに応用・展開し、表現として突きつめていきます。

プロダクトデザイン専攻

家具・インテリア雑貨・文具・アクセサリーやコミュニケーション・インターフェイス・遊び・暮らしなどの製品デザインや企画の実技・演習・講義を通し、「考える」発想力・「創る」技術力・「伝える」表現力を高め、現代生活に対応したデザインを学びます。

環境デザイン専攻

より快適な生活空間のデザインを目指して身体を取り囲むあらゆる空間の企画・デザインを行います。インテリア・ディスプレイ・建築デザインから、公園・庭園・街並などの景観デザインや都市デザインまでをトータルに学びます。

工芸専攻

工芸の知識と技術を習得し、伝統工芸から現代アートまで自由な発想による新しい創作活動を行います。1年次では染、織、刺繍、陶、ガラスの素材を体験し、2年次では「テキスタイル」「陶・ガラス」を選択、3年次からさらに専門に分かれて学びます。

りの学科構成で、卒業までの間、より一層充実した教育および進路・就職サポート、学生生活サポートを行っていきます。キャンパスも卒業まで従来通りのキャンパスとなります。

アート・デザイン表現学科（杉並キャンパス）

4年制・160名

社会との繋がりを重視し4領域のコラボレーションによってアートとデザインをクリエイティブに表現していきます。都心の利便性を生かして実践的な教育を行い、プロジェクトに取り組みコミュニケーション力を身につけます。

メディア表現領域

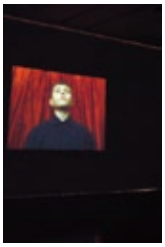
先端テクノロジーを女性の感性と優しさで生かし、物語性のあるアニメーション、ゲーム、キャラクターや広告デザイン、映像、ネットコンテンツ、メディアアート作品等、時代に即した知的で斬新なコンテンツ制作を実践的に学び、提案していきます。

ヒーリング表現領域

ヒーリング（癒し）を目的としたキャラクターデザイン、絵本、ぬいぐるみ、玩具、壁画などの作品制作や、空間デザイン、ワークショップ、プロジェクトの体験を通して、ヒーリングとアート・デザインの関係を学んでいきます。

ファッションテキスタイル表現領域

現代人に必要とされるファッションとテキスタイルの知識や技術を学び、女性ならではの視点を生かしたアートやデザイン、コスチューム、プロダクト、バッグ、グッズなどの制作を行います。また地域や企業とのプロジェクトを実践します。



アートプロデュース表現領域

美術、音楽、演劇、映像など、人と社会をつなぐアートプロデュースの実践を学びます。第一線で活躍する講師を招き、「見て」「聞いて」「体験する」ことから「真実のアートの場所」を作る試みを実践的に行います。

写真：マリーナ・アブラモヴィッチの作品《Count on Us》

短期大学部

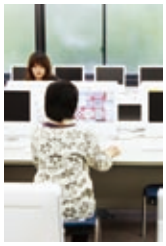
造形学科（杉並キャンパス）

2年制・180名

短期大学部造形学科は興味のある分野を体験した上で進路を選択できる自由な学びの場。1年次後期からは美術コース（平面・立体）、デザインコース（情報デザイン・創造デザイン）から選択し、専門的に学びます。

美術コース

油彩画・日本画・版画（銅版画・リトグラフ他）・テンペラ・フレスコ・モザイク・塑造・テラコッタ・木彫など、平面と立体の領域を幅広く学びます。ジャンルにとらわれない幅広い学習をしながら、それぞれに適した表現を追究していきます。



デザインコース（情報デザイン Coto Design）

デザインを通して情報（Coto）をコミュニケーションするために、基本となるヴィジュアルコミュニケーションの理論と方法、広告媒体となる印刷や Webなどのさまざまなメディア表現を実践的に学びます。

デザインコース（創造デザイン Mono Design）

プロダクトやテキスタイル、メディアといった身のまわりのさまざまな対象（Mono）を見つめ直し、既成の枠にとらわれずに素材や技法や表現の新しい組み合わせを試みます。その中で想ったことや感じたことからまったく新しいデザインや表現の創造を目指します。

Lecture ・1 桃井かおり客員教授 特別講義報告

今年、芸術学部・短期大学部客員教授に就任した女優・桃井かおり氏。第1回目の特別講義が、6月20日に相模原キャンパスで行われました。桃井氏は、付属高等学校を卒業後、文学座に入団。1971年に映画『愛ふたたび』でデビュー。その後、1977年には映画『幸福の黄色いハンカチ』で、第1回日本アカデミー賞最優秀助演女優賞を受賞。また、2005年に公開された『SAYURI』ではハリウッド映画に初出演するなど、活躍の幅を広げてきました。そして今回の講義では、第57回ベルリン国際映画祭で最優秀アジア映画賞を受賞した、初監督作品である『無花果の顔』を上映しながら、在学中の体験談や女優業についてお話ししてくださいました。

俳優という仕事は、与えられた役の人生を妄想することから始まる

皆さんに最初に言っておきたいのは、私「俳優」なんですね。女なので「女優」ってことになってるんですけど。役者っていう仕事は、せりふを覚えて、上手に演じるということだけど、できるだけ「つじつま」を合わせたいわけですよ。つまり、「せりふ」を手がかりに役の人生を妄想することで、その人が感じたことや経験したことを、実際に私自身も体で感じることが理想なんです。

例えば、母親の役を演じるとしても、私は実生活で経験したことがないから、演じ方がわからないのね。だから、母親というくくりではなくて、「私が母親になったら」っていう妄想をするわけ。それは、「昔のお殿様ってこうだったのかな？」って想像するのと同じように、妄想しながら発見していく感じなんです。

また、ものを作る人間は、追いつめられるとどんどん苦しくなるときがあるから、「錯覚する」っていうやり方もあるんです。追いつめられてもいいことはないんで、楽天的に物事を考えることで、方法によっては簡単に逃げられるんです。

実際に、私のように能天気に58歳まで生きてきた人がいるということをみんなに知ってもらいたくて、女子美の先生方は、私を選んだと思うんですね（笑）。

女子美に入っていなければ、今の「私」は存在しない

女子美に入学していなければ、俳優にならなかっただろうなと思います。その理由は、自分で目的を持って何かを始めないと、キャンバスが埋まらないっていう経験を女子美でしたからですね。

最初の授業は、古代ローマの軍人の「アグリッパ」という彫刻を描くデッサンだったんですね。けれど、女子美に入るまで、デッサンを経験したことがなかったんですよ。描けないでいたら、担当の先生が、「感じたまま描いてごらんなさい」って言うわけ。だから、放課後一人でアグリッパの耳を触ったり、頬を触ったり、首を触ったりしてたんですよ。そのとき描いた絵は、唇がやけに大きくて、あとはモヤっとした抽象画のようになってしまったんです。その絵を見た先生が、「今度は、見たものを正確に描いてみようよ」っておっしゃったんですね。

それで今度は、ポラロイドで写真を撮って、コピー機で拡大して、トレーシングペーパーでなぞって、キャンバスに写して、さらに木炭でなぞった作品を提出したんです。「簡単に写真が撮れる時代なんだから、別に写生しなくてもいいだろう」と思ったわけ。そしたら先生に、「その発想がすごいね。でも、それでは君は、写真に撮ったものしか描けないね」って言われてしまった。でも、先生のその言葉をきっかけに、「見えないものを描くこともできるのでは？」ということに気がついたんです。それからは、目で見えているものよりも、妄想しながら描くことの方がおもしろいように感じて、まじめにデッサンに取り組むようになったのを覚えています。もし先生が「このバカが！」って思って相手にしてくれなかったら、たぶん今の「私」にはなっていないと思いますね。

初監督作品は、「長生きしたくなる映画を撮ろう」と思った

この映画を作るきっかけは、俳優の仕事をしているときに、「ストーリーのために俳優が存在する」っていう考えに飽きていたから。どうせなら、ストーリーのない映画を作ろうと考えたわけ。でも、せっかく映画を撮らせてくれるのだから、「何を撮りたいか」っていうテーマはすごく重要だと思ったのね。実は、撮り始める前に友達が自殺してしまったこともあって、長生きしたくなる映画を撮ろうと思ったんです。その友達の口癖が、「日常はつまんないよ。生きていくって腐っていくみたいじゃない」って言ってたんですよ。それで、「死ぬってことはどんなイメージなんだろう」って考えたときに、「テレビだな」って思ったのね。テレビの画面のスイッチをオフにすると、目の前の画面が消えることだけは確かじゃない。反対に、生きているってことは、画面が点いている。そしてそこには日常がある。その日常って、死んだ友達が言うように、平凡でつまんないわけ。だけど、どうやったら生きている日常を楽しくできるかを考えなきゃと思ったのね。

それから、ごはんを食べるときに、好きな男が生卵をずるずるすするのが、どうしても嫌だとするでしょ。でも、別れて100年経って思い出になると、「あのとき幸せ

だったな」って実感するかもしれない。でも私は、思い出になって気づくのは嫌だなって思ったのね。だから、「今」を感じられる映画を撮ろうと決めたわけ。結局、過去も未来も今の連続だから、映画も今の連続が絶対いいって思ったのよ。

お客さんが何かを感じてくれなければ、何の充実感も得られない

監督業をするようになって、役者を見る立場になったとき、俳優業は、「他人になって自分を見ること」が、表現の仕方として大事だと思ったのね。

以前、ロスに映画を撮りに行く機会があって撮影が落ち着いてきた頃に、スタッフを集めて、クリスマスツリーを飾ったんだけど、3メートルもある大きなクリスマスツリーだったから、へとへとになってしまったのよ。私は、「クリスマスツリーを飾った」という喜びに浸りたかったけれど、疲れの方が強くて悔しかった。だから、「他人になったつもりで、クリスマスツリーを見てみよう」と外に出て、ツリーを眺めてみたのね。そしたら、ロスという最高のロケーションで、シャンデリアがある豪華な部屋に、大きなクリスマスツリーが飾ってあるのを見て、初めて「すごいな、きれいだな」って思えたわけ。

でもその時、「どうして他人になってみると、自分の幸せがわかるんだろう」ってふと思って。クリスマスツリーのように、実際に存在している絵やオブジェは、眺めているだけでも何か感じられるものがあるじゃない？でも、役者の場合はそうではなく、役を演じている私たちを見て、皆さんが何かを感じてくれなければ、役者は単に眺めさせているだけで終わってしまうのよね。

『無花果の顔』で、お父さんが死んだあとの食事シーンがあるんだけど、そのシーンでは、まるでお父さんが生きているかのように振舞っているお母さんを描いたの。お母さんだけを第三者から見ると、「気でも動転しちゃったのかな？」とも思えるような演技なんだけど、横に子どもが二人いるからこそ、「お父さんが生きていた頃の、いつもの食事に見せかけることで、子どもを支えようとしてるんだな」って第三者が感じることができるわけ。

私たち俳優は、感じたものを表現した「つもり」で終わらせてしまうと、ただの自己満足になってしまうことがある。だからこそ、「これは第三者からどう見えるのだろうか？」を常に深く考えることが重要だと思うのよ。

困難な状況だからこそ、新しい発見を導くことができる

『無花果の顔』に出演してもらった花ちゃん（山田花子さん）の演技は下手でした（笑）。でも、この下手さがとてもいいでしょ？私は文学座で、たくさん表現の仕方を習ってきたわけ。例えば、「誰が選んだ道でもない、自分で選んだ道じゃない」というせりふがあったら、『そこは「道じゃあ」と伸ばしなさい』と教えられたりしたんだけど、花ちゃんを見てたら「習ってきたことはいったい何だったんだろう？」って思うくらい、その下手さに憧れちゃった。

でもね、だんだん撮影を進めていくうちに「下手もいいけど、いい加減にしろ」って思っちゃうときもあるのよ（笑）。花ちゃんに「演じる」ことを理解してもらうために、いろんな荒技を使ってみたけど、どうにもならなかったのね。今まで私が知ってるタイプの人間じゃないというか、温度感が違うというか……。だから、「この人に太刀打ちするには、そのまま使うしかないな」って覚悟を決めた。新しい経験をするなら、より難しいほうがいい。だって、困難だからこそ、チャンスになるわけじゃない？

頭を使わず、感じたままに、筆をすっと加えていく感覚

私も学生の頃は、先生に「さぁ、自由に描いてみろ」って言われても、どうすればいいのか、ただただわからなかった。だって自由に描く方法って誰も教えてくれないじゃない？でも今は、頭を使わずに、感じたまますっと、ひと筆、ふた筆と筆を加えていくほうが「おもしろい」って思えるようになったの。追い詰められることで、今まで体の中に蓄積されていたことがパァッと出てくる感覚がおもしろいのよね。今日の講義も、引き受けたのはいいけど、ゆうべは眠れませんでした。結局、夜中の2時まで、どんなことを言ったらいいのか悩んでいたんですね。でも、それでは「いい授業だった」と言われたいみたいじゃない。だから、原稿を作るのをやめて、お酒を飲みました。せっかくだから、かけられるだけのプレッシャーをかけて、今日の講義で自分が何を話すか試してみようっていう実験をしたわけ。

それから、私の話を聞いているだけではつまらないと思うから、皆さんも何か話してみませんか。皆さんだけが学習するのではなく、私も学習しなければ損だと思うのよ（笑）。

桃井 かおり（ももい かおり）

東京生まれ。12歳で英国ロイヤルバレエアカデミー留学。本学付属高等学校を卒業後、文学座養成所を経て、1971年に映画『愛ふたたび』でデビュー。1977年には映画『幸福の黄色いハンカチ』で、第1回日本アカデミー賞助演女優賞受賞。2006年に初監督作品となった、映画『無花果の顔』は、数々の国際映画祭で招待作品として上映され、複数の賞を受賞。2008年春には、今までの功績が称えられ、「紫綬褒章」を俳優最年少で受章。2009年に本学芸術学部・短期大学部客員教授に就任。現在は、俳優業に止まらず、歌手や映画監督など幅広く活躍している。若い世代にも絶大な人気があり、常に時代を走り続ける個性派女優だ。

桃井教授とのQ&A

講義の後半は、学生とコミュニケーションを深めるQ&Aの時間になり、学生から多くの質問が飛び交いました。ひとつひとつ丁寧に答えていく桃井氏と学生との距離は、一層近くなったことと思います。

―「神様」や「運命」をどう思いますか。

私の実家は教会だから、お祈りをするために、必ず日曜日は教会に行かなければならなかったのよ。でも、子どものころは、教会に行かずに、浜辺で遊んでたわけ。私を見つけた母親が、「親は騙せても、神様は見てらっしゃるのよ」って言うから、「神様」は、お化けみたいな存在でした。でも、今は信じていますよ。それは、「神様に恥じるようなことをしてはいけない」という、子どもの頃からの刷りこみが、すごく影響しているのかもしれないわね。

それと、「運命」というのは、何が起こるかわからないでしょ。例えば、中学生のときに、バレエ留学をしたけれど、言葉の違いについていけなくて、引きこもりになってしまった。そのときは外国人が苦手だったけれど、俳優の仕事をしているうちに、外国に行く機会もあって、英語がわかるようになってきたのよ。そのとき「何でもやってみるもんだな」と思ったわけ。

だから、「今日」という日に、運命の石ころが転がってきて、自分で拾うという感じよ。そのときに選び取るのではなく、単純に、「転がってきたから拾う」っていう程度のことなんです。そこから、新しいことが始まる……。それが、「運命」だと思います。

―急に寂しくなるときがありますが、どうたらいいのでしょうか。

私も寂しくなるときがありますよ。でも悩んじゃだめなの。高校生のころはとても地味で、「こんな自分じゃ誰も好きになってくれない」って思うほど自分のことが嫌いだった。だから、誰かに化けるために役者になろうと思ったの。デビューしたころも、自分に自信を持てなくて、横顔を撮ってほしくなかった。でも、今は髪を耳にかけて、顔を堂々と出せるようになっています。

あと、とても悩んでいる時期に、は虫類になった夢を見たわけ。そのとき、「壁にぶち当たる」のは、人間だけだということに気づいたの。は虫類は、向かっていく前に逃げるから、壁にぶつかって頭を痛くすることはない。だからこそ、欲望のまま行動して、壁に当たってしまったら、「人間なんだな」と思えばいいんです。要は、楽観的に物事を考えるべきだってこと。

ただ、急に一人で飛行機に乗って、アフリカとかに行ったりしないでね（笑）。日本人の怖いところは、勇気を奮うと基礎体力がないのに、行ってしまうところ。基礎体力だけはつけておいた方がいいよ。

―「セクシーな女」をどのように考えていますか。

今のままでも「セクシーだ」と言ってくれる方はいるんですよ。でも、私たちの仕事は、雑誌やテレビが提案してくれるセクシーではなくて、「自分流のセクシー」じゃないと役に立たないのね。ときどきセクシーな格好を指定してくる監督がいるけれど、「私」じゃなくても、他の人でも通用しますよね。「それ誰よ」ということになるじゃない。だから、「自分流のセクシー」を求めるのであれば、雑誌などを参考にして使ったとしても、意味はないと思うのよ。

―私たちへの質問はありますか。

ありますよ。例えば将来、本当に自分たちが学んだアートの仕事に就けるのか、食べていけるのかって不安でしょ。それってどう考えているのかな。

東京で暮らすには、就職しなければ、何かしらお金がかかるように感じるでしょ。でも、東京で就職しなくても生きていけるのよ。海外もあるし、他にもお金が行き来しない国もある。「就職しなきゃ食べていけない」っていうのは、都会に住んでいる人の勘違いなのよ。

以前に長野県と山梨県の境にある百名山のひとつ、「八ヶ岳」で暮らしたことがあるんです。田舎で暮らしていると、食べる分だけ稼げばいい。もしくは食べる分だけ、育てる。食べていくのは就職しなくてもできるのよ。

最初にデビューして、神代辰巳監督に、「メジャーになって、好きな映画をいい監督たちに作らせろ」って言われたんで、理に適ってると思ったんです。メジャーになれば好きなことに挑戦できる媒体だから、「頑張る」っていう気持ちが大切なのよね。だから、監督までやらせてくれたときには、「ちょっと図に乗ってるな」と思ったけど、これまで経験して積み上げてきたことは無駄にできないと思ったから、反対に「図に乗ってやる！」と思いました。その分、おもしろい実験ができると思ったのよね。今日は本当に、皆さんに会えてよかったです。私にとっての女子美は、「愛する女子美」です。個人的に“おもしろい奴”が多いと思うので、知り合いになりたいです！

桃井かおり教授の講義を聞き、学生はどう感じたのでしょうか。感想を始め、これから役立てたいことを聞いてみました。

デザイン学科　ヴィジュアルデザインコース3年
八木 かおりさん

桃井さんの話を初めて聞きましたが、とても58歳には見えないパワフルさがありました。これから授業で映像のことを学ぶので、桃井さんの映像を見て、制作の参考にしていきたいと思っています。

メディアアート学科2年
土方 理沙子さん

桃井さんの生き方に影響されました。「マイナス思考は無駄だ」ということがわかったので、これからはプラス思考にしていきたいです。

デザイン学科 環境デザインコース2年
東 瞳さん

「今が止まればいいのに」って、何回も思ってたんですけど、歳をとることが、初めて楽しみになりました。

デザイン学科　プロダクトデザインコース2年
福本 有香子さん

桃井さんはテレビで拝見するままで、こんなオープンに話してくれるとは思わなかったです。学生時代の桃井さんに会いたかったです。

「学生に親しみやすい話し方をしてくれて嬉しかった」とデザイン学科ヴィジュアルデザインコース3年の八木かおりさん

Topics 1 北川フラム教授総合ディレクション 第4回「大地の芸術祭—越後妻有トリエンナーレ2009—」 レポート

芸術学部の北川フラム教授が総合ディレクターを務める「大地の芸術祭—越後妻有トリエンナーレ2009—」が7月26日〜9月13日にわたり開催されました。今年で4回目となる芸術祭には、地域と都市、アーティストと里山など、交流と協働の中から生まれた350点以上のアートが妻有の広域エリアのさまざまな場所で展開されました。その中で、女子美からは眞田岳彦教授、杉田敦教授、卒業生の石塚沙矢香さん、小原典子さんが出展して話題を集めました。

十日町の交流拠点となったキナーレ

「アートを媒体に地域の魅力を引き出す」をスローガンに、北川フラム教授らの働きかけにより、2001年より開催されている大地の芸術祭。今や越後妻有地域の里山を舞台に3年に1度開催される国際芸術祭として世界的にもよく知られるイベントになりました。第4回目となる2009年の芸術祭には、女子美からも多くの参加がありました。眞田教授は、織物産地である十日町の伝統文化をさらに次の時代に繋ぐことを目指して、十日町エリアにおいて「絲の家プロジェクト『糸+（プラス）』」を展開しました。交流拠点となったキナーレの1階では、地域の糸や布のデザインを発信する展示や、きもの歴史館、体験工房などを実施し、全国の美大生たちの繊維作品展を開催しました。また、十日町博物館では、越後あんぎん伝承会との作品展なども展開。地域繊維、伝承技法の特色を生かしたワークショップなども開催されました。

「杉田敦＋art&river bank『critics coast—批評家の海岸』」と題したプログラムを会期中を通じて行ったのが杉田教授。浦田の空家を利用した会場では、批評家・評論家・キュレーターの発言を集めた映像「ディクショナリ」を常設展示しました。また、会期中の土曜日には、毎回多くのゲストを招いての国際ディスカッションを開催。越後妻有の地からアートや教育など、現代が抱えるさまざまな問題についてディスカッションが行われました。

石塚沙矢香さんは、十日町集落内の空家で、お米を素材としたインスタレーション作品「うかのめ」を発表しました。うかのめ（稲魂女）とは、食物をつかさどる神のこと。その作品は、日本の食卓の風景を彷彿させるものでした。また、小原典子さんは「再生のカプセル」と題して十日町の旧赤倉小学校内に蛹のオブジェを設置。暗闇の中で羽化しているような蛹が浮かび上がる姿を表現しました。

地域に内在するさまざまな価値を、アートを媒体として世界に発信し、地域再生の道筋を築こうとする大地の芸術祭。妻有の地に残されている空家や廃校などをアートで甦らせようとする試みの大切さをまさに体感するものでした。

ゲストを招いての杉田教授のディスカッション

眞田教授の作品展示

農具置場では映像「ディクショナリ」を展示

Topics 2 新潟県柏崎市で「たんねのあかり」実施

8月22日、新潟県柏崎市にある「谷根（たんね）」という大自然に囲まれた小さな地域の小学校で、「たんねのあかり」というイベントが実施されました。イベントが行われた上米山小学校は生徒数8名。135周年を迎えた本年度をもって閉校になります。イベントは、夏の夜、小学生や地域のみなさんと小学校でキャンドルにあかりを灯し、小学校と地域の思い出をほんのり照らそうというものでした。イベントの提案を行ったのはデザイン学科非常勤講師の下田倫子氏です。地域と連携し、何かワークショップイベントを開催できないかと、現地を視察したことがきっかけでした。準備はデザイン学科の学生5名（高橋舞、田邊千香子、千田智子、黄筑波、野原理恵）によって半年前から始まりました。

お天気にも恵まれた当日、運営に女子美生の当日スタッフや卒業生も加わり、小学校関係者、「たんねのあかりサポート委員会」をはじめ、地域の70世帯を巻き込み、イベントは大盛況。このイベントに、谷根の地域活性化を期待する声も多く、次年度に継続を検討中です。学生にとっては地域と連携し、イベントの企画・運営を学ぶ好機となりました。今後、他学科の学生にも多く参加してほしいと下田氏は話します。

なかよし給食会で小学生と話し合い

「今夏、美しい景色に包まれた谷根地域に灯った「たんねのあかり」はやわらかく灯り続けます。学生の皆さんの次回のご参加を心よりお待ちしています！」

イベント当日の様子

Report ・1

第53回ヴェネチア・ビエンナーレ2009
日本館コミッショナー南嶌宏教授インタビュー

芸術学部芸術学科の南嶌宏教授は、イタリアのヴェネチアで2009年6月7日から11月22日まで開催されている、第53回ヴェネチア・ビエンナーレに日本館コミッショナーとして参加されました。無事オープニングを終えた南嶌教授から今回の展覧会についてお話を伺いました。

■継続して見ることの大切さ

100年以上の歴史を持ち、もっとも権威あるとされる国際美術展であるヴェネチア・ビエンナーレを、私は1988年から20年間で10回、定点観測のように見続けてきました。最初に行った時の緊張感をいまでもよく覚えています。そのとき抱いた、世界の最先端のアート、そして、それぞれの国を代表するコミッショナーとアーティストたちの仕事に対するリスペクトは、今も私を戒め続けていると言っても過言ではありません。もちろん、その時、まさか将来自分がコミッショナーをやることになるなんて思いもしませんでしたけれど。

しかし、この20年間で痛感することは、何よりも人の回転がとても早いということです。継続して見ている人が本当に少ない。2、3回来ただけでもう来なくなってしまうのです。それはヴェネチア以外の大きな国際展にもいえることで、ある時間をかけないと見えてこないものが、ものすごくあるんですね。と同時に、観客としてでなく、企画者の一員として関わらなければ見えないこともたくさんあって、たとえば、今回の「メイキングワールド」というテーマも、各国の作家がすでに決まった後に出てきたものであるにもかかわらず、「世界を構築する」というテーマのもと、77カ国が集ったというような報道が少なからず見受けられたように、コミッショナーとして内部に関わった立場からも、正確に伝えていかねばならないと思っています。いずれにしても日本の代表として、このヴェネチア・ビエンナーレに関われたことは、これからの仕事の展開を考えるときに、私にとってまた新たな希望を与えることになりました。

■コミッショナーとしての思い

やなぎみわさんを作家に選び、作品プランの提出をお願いしたのが2008年の5月のこと。私に届いた『Windswept Women:老少女劇団』と名付けられたその作品プランをもとに、国際交流基金から指名された4名の評論家、キュレーターによる口頭によるプレゼンテーションが審査され、私がコミッショナーに選ばれたのは8月の上旬でした。正統とされる美術史がフィクションであるように、日本だとかアメリカだとかいうナショナリティもフィクションでしかありません。ですから、私には国家やその国独自の文化というようなフィクションを背負って、ヴェネチア・ビエンナーレに参加しようという思いは、まったくといっていいほどありませんでした。それは、やなぎさんも同じ考えでした。むしろ、そのフィクショナルな要素を無効にし、もっとそれを超えたところの、いかなる文化的背景を持っていたとしても、同じようなドキドキ感を持てるもの、今、この時代にあって私たちが共有すべき感性をいかにして回復するかということを念頭において、やなぎみわという作家を想起したのかもしれませんね。あの作品を見て、あとから意味づけをする人がいるかもしれませんが、現代美術のどの文脈に入れるかということは重要な作業ではないのです。

日本館は黒いテントで覆われた。ビエンナーレの会場の中にうっそうとした闇をつくる、その中にいくとまたテントがあって、中に入ったと思ったらまた外にいる。

■資産化されない原初的な感覚

事実、やなぎさんが創り出した作品に対する驚きにも似た反応は、日本人だろうが、イタリア人だろうが、ロシア人だろうが、誰もが一人の人間として、非常に近いものがありました。そういうことが今、実は何よりもこの時代にあって大事なことなんですね。全員が同じことを思うことに対して危険性を感じる人がいるかもしれませんが、そうじゃない。あの印象は何にも資産化されない感性の発露の表れなんですよ。人間を原初的な存在に帰す、その回復の回路を解き放つ力のなせるものであったのです。

展示風景

とはいえ、やなぎさんのこれまでの代表作である『マイ・グランドマザーズ』や『フェアリー･テール』といった作品を、そのままヴェネチアに持っていこうとは思いませんでした。それは狭義のフェミニズムという文脈だけで解読されてしまうと思ったからです。しかし、私からどういう作品を作ってくれというリクエストをしたわけではありません。ただ、ヴェネチアだけのための「新作」をお願いしたいとだけ伝え、そのプランの提示を待ちました。もし彼女のプランに満足しなければ、再提案をお願いするつもりでしたが、1ヵ月後に届いたそのプランに私は感動し、その時点で、私はやなぎみわが選ばれるという確信を密かに得ることになったのです。

展示会場の中の小さな黒テントでは、映像作品が映し出されている。

■ハンセン病の療養所と1枚の写真

しかし、多くの優れた作家がいる中で、私がやなぎみわという作家を選んだ理由には、実は神の啓示ともいうべきひとつの出来事があったのです。それはハンセン病の元患者さんが導いてくれたひとつの出来事でした。

私は熊本市現代美術館の開館準備の2000年から、開館後の2007年まで、全国13カ所のハンセン病の療養所、さらに、韓国、台湾の療養所を何度も訪問し、言語を絶する差別の中で、元患者さんたちが様々な思いを込めて描いてきた絵を調査してきました。ある時、青森の松ヶ丘療養所で、絵を描き続けてきた成瀬豊さんというおじいちゃんを訪ね、楽しい話を伺い、そろそろ辞そうとしたとき、その横でにこにこ話を聞いていた奥様のテルさんというおばあちゃんが､｢これ見てって｣と言って押し入れの奥から、額装された小さな写真を出してきたんです。私は驚きました。それは50年前、療養所に送られる前に撮られたもので、桜の木の下でとてもきれいな白いドレス姿をした若き日のテルさんだったのです。50年前の自分、本当の私はこれなのよ。そんな思いを伝えるその写真とともに、深い悲しみが私を襲うことになったのです。目の前のテルさんは、その後、病気が発症し、顔も体も変形してしまっている。希望であるはずの50年という未来の果てに訪れた人生の時間の残酷さを象徴していました。

成瀬テルさんの若き日の姿

■50年後の自分を考える

その対極にあるのが、やなぎさんの『マイ・グランドマザーズ』です。これは様々な人に自分の50年後の姿を想像してもらい、それをやなぎさんが写真作品として仕上げるというもので、多くの人が50年後に自分の夢を果たす、幸福の姿を表現した作品であると理解しています。しかし、私はこの作品に対し、切なさや悲しさを感じ、むしろ死の匂いさえ感じてきたのです。そして、その死にも似た、50年という時間の質感を際立たせることになったのが、そのテルさんの差し出した小さな写真だったのです。

そして、国際交流基金から電話があり、指名コンペの候補者の1人に選ばれたと告げられたその瞬間、私の中に大きく引き伸ばされたそのテルさんの写真の前に立つ、やなぎさんの後姿が舞い降りたのです。それは実際に「ATTITUDE2007」という国際美術展を企画した際に、私が実際に目にしたやなぎさんの美しい後姿でした。それはヴェネチア・ビエンナーレの日本館コミッショナーという名誉な使命を受けるために、神がもたらしたとしかいいようのない啓示だったのです。

■人間に勇気を与える場として

私はコミッショナーを決定するプレゼンテーションのときにも、成瀬テルさんの写真を審査員に見せながら、なぜやなぎみわを選んだのかという説明をしました。それは人間の生きることと、死ぬことが同じものとして、やなぎみわさんの作品の中に共存していることを伝えたかったからでした。それはある意味では死なない生の象徴だと考えることもできるのです。私はヴェネチア・ビエンナーレを見続けてきた中で、このビエンナーレは人間に勇気を与える場でなければならないし、あってほしいと思ってきました。それは狭い意味での現代美術に奉仕するだけのものではなく、100年以上も続いてきたこのビエンナーレの歴史に対し、あるいは美術そのものの歴史に対する勇気という意味においてです。その意味において、今回のやなぎさんの新作「Windswept women」は、まさしくこのヴェネチア・ビエンナーレにふさわしい作品として、深い記憶を刻んでくれたのではないかと思います。

南嶌 宏（みなみしま ひろし）
筑波大学芸術専門学群芸術学専攻卒。熊本市現代美術館館長、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事などを歴任。プラハ国際現代美術トリエンナーレ2008国際キュレーターを務める。2009年「西洋美術振興財団学術賞」受賞。主な著書に評論集『豚と福音』などがある。

Lecture ・2 山本耀司客員教授 特別講義報告

4月13日の4・5限に、ファッション造形学科で山本耀司客員教授による特別講義がおこなわれました。ファッションマーケットの概況についてコメントがあった後、スカート、シャツ、ジャケットのそれぞれの作り方のポイントについて講義があり、続いて学生のデザイン画や作品を講評していただきました。また、その後、学生からの質問に丁寧に答えていただきました。

ドン底の時代にモノを作って生きる

まず、暗い話をしようか。今、ファッション業界はドン底です。ご存じだと思いますが、アメリカのサブプライムローンショックの影響で、金融史上100年に1度あるかないかの世界同時不況です。ファッションだけではなくて、すべてのマーケット・業界がそうですが、特にファッションはドン底です。ただ、素晴らしいと思ったのは、先ほど小倉先生から、ここを出た学生の就職というのは、去年までは100%、今年が90%だと聞きました。一般には大学を卒業しても半分以上が就職できないんじゃないでしょうか。世界中でこんなに景気の悪いときに90%なんて信じられない。皆さんがこれから卒業する頃がどういう時代なのかはわかりませんが。ただ、一つ言えるのは、みんなはモノを作って生きていくということ。だからここにいるんでしょ。そうですよね。ものづくりの人生というのは、できるだけ自分の思いを言葉にしたり説明しないで、自分の作るものに込めていく。そういう人生を生きること。それは大変な人生です。

例えば自分の好きなもの。自分の持っている一番強いテイストのものは、世の中に受け入れられないことの方が多い。それは、時代によって受け入れられたり、なかったりする。で、受け入れられない時に、どう我慢するか。そこで自分に妥協して時代に合わせてものを作ったりすると、どんどん自分が嫌いになっていくでしょ。自分が本当に好きなものを、一生、作れなくなるまで作るということは一番幸せなことなんだけれども、なかなかそうもいかないのが人生で。モノを作って生きようと決めたということは、自由を選択したことになる。その自由の重みというのは、裏返せば自分で責任を取ることでもあるわけで。要するに楽しいことと苦しいことがコインの裏表のように隣り合わせ。ものづくりとはそういう人生です。

まじめに服を作ろうとするデザイナーが一番苦しんでいる

今のファッションマーケットっていうのは、英語で言うと「shit」です。まずイタリア・フランスのラグジュアリーブランドというのが、世界中の大都市の一番いい場所を占めている。そのブランドたちは、服をまじめに作る気はありません。バッグとかジュエリーとかアクセサリーを売るためのプロモーションとして、パリコレクションに若いデザイナーを起用して。要するにビッグブランドというのはモノを売るためのプロモーションでショーをやっているのがほとんどです。

今度は正反対に、中国製の、2回着たら駄目になっちゃうような服。あるブランドが、例えば40坪の店をルミネに出すと、1日で1千万売るんだって。そういうブランドはタレントを使ってモデルを作って、そして宣伝する。そうすると、みんな「キャー、可愛い」といって同じ格好をする。さらに、美容業界のプロフェッショナルに、頭のてっぺんから足の爪の先まですべていじってもらう。流行のヘアスタイル、流行のネイル、流行のメイキャップ。全部プロに体中いじってもらうから全員一緒に見える。見分けがつかない。こういう僕に縁がない人たちというのが日本のマーケットで7〜8割。これは皆さんのように今からまじめに勉強していこうとする人には縁のない人たち。そんなものを気にしていたら駄目。まじめに服を作ろうというデザイナーが、今一番苦しんでいます。

ここで勉強することは、本格的な服づくり。勉強するのであればやっぱり本格派のデザイナーを目指すということを前提として、今日は僕の服づくりに対する考え方をおさらいしてもらいたい。

真に実験的で真に新しい服はないかもしれない

—ヨウジさんが服をつくる上での一貫したテーマは何でしょうか。

山本：女が女っぽい服を着るのは魅力的でないと考えています。ちょっとマニッシュな服を着るのが一番セクシー。男から見て「かわいいねー」という服は絶対に作らないというのが一番のテーマです。僕はパリコレの中での男のデザイナーの中で唯一女好き。あとはみんな男好き。生きる化石と言われています（笑）。生きる化石としては、着れば着るほど、「中はどうなってんだろう」とイマジネーションを抱くんですね。隠されれば隠されるほど追いかけたくなる

ジャケット作りのポイントを講義する山本教授

というセクシュアリズム。女性の体をきれいに隠すためにはカッティング力、シルエットを作ること、動きをつけること。だから色をつけるのを忘れちゃって。常に引けないのはカッティングです。

―魅力的に感じる、興味を持つのはどんな人でしょうか。

山本：哲学的質問です。ずらしてずるく言わせてもらうと、世の中、普通に美しい女性はいない。美しい瞬間はあってもね。何が美しいのかというと、精神が美しいんだと思う。単にきれいな子がいてもドシンとくる美しさと違う。本当にセクシーな人は本当に知的です。世界中で出会った人の中で、横にいてポーッとしちゃうのはピナ・バウシュ。強いものが伝わってくるとき、すてきだなと思います。世界的なアーティストで、作品よりその人が魅力的だということがたびたびありました。

―「オンリーワン」の作品を作りたいと思っているのですが、いつもどこかで見たものをつくってしまいます。

山本：僕は今年3月のコレクションの靴は全部フェラガモに作らせたんです。1年前からイタリアに飛んで、フェラガモの靴のアーカイブを全部見せてもらいました。彼らはいろんな実験をしてきたのです。僕らの世代のデザイナーがやろうとすることは、すでに全部あの世代が19世紀からやってしまっている。真に実験的で真に新しい服はないかもしれません。そこにこだわるよりは、まじめに、心を込めて服を作り続ける。そのうち周りに「これきみのだよね」と言われるくらい、服に自分が入っていく。今はマーケットがshitなのでみんなモノではなくマークを買っている。まじめに心を込めて服を作り続けてください。必ずそれがブランドになります。

―素材を選ぶときはどのようにされているのですか？

山本：日本の生地屋は自分のリスクで反物を抱えていないんです。注文が入ってからはじめて織るんです。若いデザイナーには大変な時代です。面白い生地を獲得するのに先にお金ありきですから。駆け出しに対して生地屋が信用で生地を織ってくれるか、ということです。人間力も大事になります。生地屋の数も減っていっています。みんなの卒業の頃には日本に機屋がなくなっているかもしれない。生地屋がみんな中国へ移ってしまっているのです。ユニクロは肌触りのよいコットンの開発に3～4年かけています。ウールもインド奥地へ行って4～5年かけて開発しています。それぐらい研究してやっているのです。日本から日本製は消えてしまうかもしれません。メイドインジャパンを守れるかどうかはやばいところにきているんです。

―昔、ヨウジさんが働く女性へのメッセージを「地べたに這いつくばって」と言っていたのが印象的でした。

山本：僕は働いている女性に育てられたので、働いている女性、懸命に何かに夢中になっている女性に惹かれてしまうんです。

―もし女性に生まれていてもパリコレで服を作って発表していましたか？

山本：この前、ジャスティン・デイビスと会話していたら、「今のファッションマーケットにうんざりしているから、パリのプレタポルテコレクションシーンから抜けようかな。」と言うんですね。「いい考えだ。やりたいことをやるべきだ。世の中にはborn to wasteなやつらばかりだから」と言ったのですが、消費するために生まれてきたやつ、そんなやつらのためにまじめに服作ってられねえよ、ということです。女に生まれようが男に生まれようが、精神同じなら作っていたかもしれないし。

今にして思うのは自分がファイン・アーティストだったらどんなに楽だったろうということ。一人で始めて一人で終わる。ファッションデザインはシステムだからそうはいかない。どうしてもチームでやる仕事です。今、世界中で社員が600人くらいいるわけです。これが重くてさ。

最後に「女子美は僕が本当に、教えて、一緒に学んでいきたいと思う学校です。」という嬉しい一言で講義を締めくくられ、新学期が始まったばかりの学生たちにとって大きな刺激と励みになる授業となりました。

「絵がうまい人はスタイル画ができあがった時点で気持ちが終わっちゃうことがある。服は絵の通りには作れないからね。カッティングのときに出てくるアイデアの方が重要。このまま放っておくとイラストレーターにはなれても服のデザイナーにはなれなくなっちゃうよ。」

「ドロップショルダーと鉄砲袖の作品。後が面白いのに袖がいい加減。
デザインと袖付けが合ってないんじゃない。いわゆる普通の意味で『アイデア賞』。でもこういうのばかりやってちゃ駄目で、服の基本や応用をしっかりおさえた上で遊べるようにならないとね」

山本 耀司（やまもと ようじ）

東京生まれ。慶應義塾大学法学部、文化服装学院卒業。
69年「装苑賞」「遠藤賞」を受賞。72年ワイズ設立。
81年に発表したパリコレクションで一大旋風を巻き起こし、続く若いデザイナーたちに多大な影響を与える。02年にはアディダスとの共同ブランドY-3のクリエイティブディレクターに就任、ファッションとスポーツという2つの世界を融合し、革新的なスタイルを打ち出す。また、'89年ヴィム・ヴェンダースによるドキュメント映画「都市とモードのビデオノート」発表のほか、ワーグナーのオペラ、ピナ・バウシュ舞踊団、北野武監督映画などの衣装制作も手がける。
「TALKING TO MYSELF」（02）、「A MAGAZINE」（04）など関連刊行物多数。94年フランス芸術勲章「シュヴァリエ」受章、05年フランス国家功労勲章「オフィシエ」受章。08年ロンドン芸術大学「名誉博士号」授与。

International ・1 協定海外留学レポート（フィンランド・中国編）

大学と短期大学部には協定海外留学制度があり、海外の学術交流協定大学へ学生を派遣しています。今回ご紹介するのは、2009年1月から同3月にかけて実施した短期プログラムに参加した3名の学生の留学レポートです。ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学文化学部（フィンランド）へ5週間留学した櫻井陽香さん（短期大学部造形学科2年）と梶原久美絵さん（短期大学部造形学科1年）、広州美術学院（中国）へ4週間留学した込戸かんなさん（大学院修士課程洋画研究領域1年）がそれぞれの国の魅力を報告します。さて、どんな留学生活だったのでしょうか。　（国際センター）

櫻井 陽香（留学国：フィンランド）

言語や文化が違うことはとても興味深く、一人一人の思考回路がこうも違うのかと、毎日の友人との会話の中で新しい発見をしました。現地の人たちが考える「デザイン」も、日本人の感覚とは異なりました。どちらが「凄い」とか「カッコイイ」とかではなく、認め合うことが重要であり、両方をミックスしていくのも面白い考えだなと、授業のディスカッションで感じました。フィンランドの人たちがどのようにデザインと関わって生きているのかを実際に見ることができ、本当に素晴らしい経験だったと思います。

クラスメートと一緒にスケート

放課後には、ヘルシンキのデザイナーのお店や美術館に立ち寄り、お店の人にお話を聞くこともできました。また、普段は内側からしか見ることができない日本ですが、こうして海外に行くことで、新しい目で日本を見つめ直すことができます。自分が日本人としてどのように海外の人たちにアートという面でアプローチしていけるのかを考えるいい機会でした。

留学で得たものはここに書ききれないほどたくさんありますが、物事を寛大に捉えることができるようになったことが、私がこの旅で得た最大の武器だと思っています。

梶原 久美絵（留学国：フィンランド）

今回の留学は、私の大学入学前からの目標でした。だから、留学が決定したときは本当に嬉しかったです。やっと手に入れたチャンスを無駄にしないようにと意気込み、いざ出発。現地ではホームステイ先の方が温かく迎えてくださいました。

先生、クラスメートに囲まれて

大学の授業は週4日あり、一日あたり5時間。そのすべてが課題の自主制作でした。授業でははじめ、周りの自由すぎる雰囲気に戸惑い、何が必要か、何を用意したらよいのかさっぱりわからず、不慣れな英語で先生にもじもじと尋ねる程度しか動けませんでした。ホームシックに陥り、辛い日々もありました。自分は何のためにここまで来たのだろうと、何度も思いました。でも、やがて「思っているだけでは何も変わらない。美術を楽しもう」と前向きになれました。ほぼ毎日図書館や展覧会の資料を読みあさり、クロッキー帳がいっぱいになるまで情報を描き込みました。私がそこで学んだのは、フィンランドのデザインだけではなかったし、制作過程において妥協はありませんでした。

フィンランド特有のゆったりとした時間の流れの中で、悩みながらも多くの発見と経験をし、自分の作品と向き合えたことが、この留学の1番のメリットであったと思います。

白一色の冬

込戸 かんな（留学国：中国）

広大な広州美術学院キャンパス

朝、学生たちの人波にまみれながら教室へ向かう。はしゃいでいても眠そうにしていても、墨を硯で磨りながら学生たちの表情は徐々に変わってくる。そして昼まで山水画の模写に励む。模写と先生の実演から、ひたすら学ぶ。

山水画の授業風景

実技の授業は午前中のみ。昼が近づくと次第に教室から学生が消え始め、村の食堂街が活気付く。緊張がほぐれ、和やかな時間が流れる。13時を過ぎると、大学中が一気に静まりかえる。現地の習慣で、昼食後は皆昼寝をするからだ。現地の習慣には一通り従った私だったが、これだけは時間が惜しくてできなかった。村の市場で果物などを買い込み、寮へ戻る。友人、警備員さん、売店のおばさん、用務員さん、寮の管理人さんなど、たくさんの人との長い立ち話を経て、ようやくたどり着く。語学学習の醍醐味のような、その原点のようなものを感じ、毎日実に嬉しくてたまらなかった。

異文化の中で感じられることは、予想もできないほど突拍子もなく私の日常や常識とかけ離れ、日々感動をもたらす。揺るがされた価値観は試行錯誤しながら形を変え続け、これから見るものすべてをより豊かにし、私の日常を変えるのだ。このような経験と機会を与えていただいたことに心から感謝している。

International ・2 大学院生が豪・ブリスベンで制作・展覧会開催

グリフィス大学クイーンズランド・カレッジ・オブ・アート（QCA）は本学の学術交流協定大学で、オーストラリア有数の芸術高等教育機関として有名です。この度QCAから、本学大学院生を現地に派遣して作品制作と発表をしてほしいとの依頼がありました。これを受けて、秋山友佳さん（大学院修士課程工芸研究領域1年）と黒木南々子さん（同洋画研究領域1年）の2名が学内選考を経て選抜され、渡豪しました。期間は2009年1月31日から同3月10日までの約6週間。どのように作品制作に挑んだのか、また、帰国後のさらなる活動についてお二人に語っていただきました。

（国際センター）

1　滞在中に一番印象に残っていること

黒木：私は海外へ行ったことがなかったので、現地での経験すべてが新鮮に感じました。制作では現地で出会った人に写真を撮らせてもらって人物画を描いていったのですが、その作品を通してたくさんの友達ができたことがとても嬉しく印象に残っています。

秋山：私はダンボールを使って作品を作っていて、その素材を集めるための交渉を通じて様々な人々と交流したことです。カフェやお店に通って提供してもらいました。その過程も作品の一部と考えていて、記録に残しています。

展示したダンボールハウス

2　現地での展覧会について

秋山：展覧会「mother told her...」は、QCA内のギャラリーで行いました。初日にはオープニングパーティとプレゼンテーションをし、先生や友人たちと作品やアートについて話をすることができました。この交流は、一番の成果だと感じています。私は、ダンボールハウスと収集している様子のドキュメント、日本で制作した小さな家、そして自分自身 の検証のために行った一問一答のインタビュー映像を展示しました。黒木の絵画は、現地で出会った人々を描いたものだったので、二人の作品は自然と一つの空間を作っていたように思います。

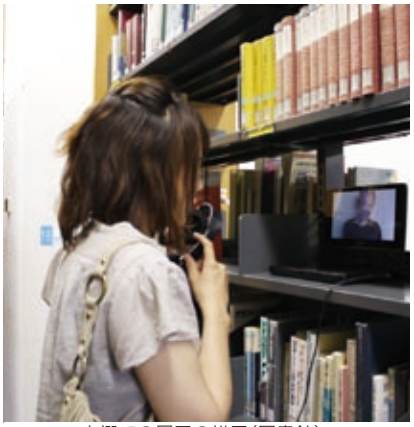
オープニングパーティの様子

展示風景（QCA）

黒木：オーストラリアでの滞在は6週間で展覧会当日までの日にちが短く、どうなるかとても不安でした。でも、振り返るととても充実した日々でした。私は現地で多くの人とつながりを持てたことから「世界はひとつ、世界がつながっている絵を描きたい」と思いました。描いた人々のモチーフが、広いギャラリーでのびのびと手をつないでいる様子を見て、そして多くの人に見てもらえて、とても感慨深いものがありました。

3　「彼女たちの視点 - visit a library - 」について

秋山：このプログラムのまとめとして、改めて展示を女子美の図書館で開催しました。QCAと同様に大学の施設を使って展示をしたいと考えていました。本を閲覧する行為と作品を鑑賞する行為は似ていて、本棚に並べた作品を見ている人の横で太宰治の本を手に取る人がいたり、テーブルで勉強している人のすぐ隣にこっそりと作品があったりと、おもしろい展覧会でした。



本棚での展示の様子（図書館）

この展示では現地での展示の検証として、日記や黒木との話し合い時のメモ、着ていたTシャツなども一緒に展示しました。この展示によって、私たちの現地での生活や活動、また人々との関わりの中で見えてくる作品を提示することができたと考えています。

黒木：アートを介してたくさんの人とコミュニケーションがとれることを実感してきた私たちの作品を、女子美の図書館という公共の場で発表することができました。機会を与えていただいたことに感謝しています。図書館で様々な種類の本と出会うように、私が描いたモチーフと出会ってもらいたいと思い、みんなが行き交う階段で「こんにちはこんにちはごっこ」というコミュニケーションを題材にした作品を展示しました。

階段での展示の様子（図書館）

図書館内のどこで自分たちの作品を見せるのが一番良いのか考えながら展示をしてみると、作品を制作している時には気付かなかった新しい発見がたくさんありました。アートが空間を彩る力も強く感じました。

Report 2 「女子美キャリア★カーニバル2009」レポート

学生たちが自主的に自分の将来や進路を考えることを支援するために行われるキャリア支援センター主催の「女子美キャリア★カーニバル」。2009年は7月30日から8月1日の3日間にわたり相模原キャンパスで開催され、のべ約3000名の学生が訪れました。カーニバルの企業説明会には、アニメーションスタジオ、キャラクター会社、ゲーム会社、文具会社など多くの企業が参加し、仕事内容や業界の最新情報を提供していただきました。また、クリエイティブ業界の一線で活躍しているゲストを招いての特別講演会では、それぞれのキャリアを踏まえた貴重なお話を伺うことができました。

7月30日（木）の初日は、いろいろな業種・職種の基礎がわかる「業種・職種まるわかり講座」に続いて、アニメーション制作会社、文具製造会社、服飾メーカー、玩具メーカーなどの企業説明会がありました。また、会場の入口には「メキシコ・日本エイズ撲滅キャンペーンポスター展」として、メキシコのポスター作品26点を展示。関連して午後から行われた「ポスターデザイン講座」と題した特別講座では、メキシコから来日したモンテレイ技術大学のカルロス・ゴンザレス教授と社団法人日本広告制作協会［OAC］理事長・日本デザインセンター社長の鈴木清文氏からクリエイティブ・ボランティア（クリボラ）の活動の歴史とメキシコのクリエイターたちについて、さまざまな視点から紹介がありました。

7月31日（金）の2日目は、初日に続き「業種・職種まるわかり講座」のあと、ジュエリー会社、デザイン会社、インテリア会社、総合広告代理店などによる企業説明会がありました。最後に行われた本学卒業生のアーティスト、呉亜沙氏による特別講演会では、これからアーティストを目指そうとする学生にとってとても参考になるアドバイスをいただきました。また、1日コースで文具メーカーによるワークショップも行われました。内容は、商品企画立案にあたり、グループワークを通して、商品のコンセプト立案と表現力の基本を学ぶというもの。担当講師の方からは、「女子美生はディスカッション能力が高い」との評価をいただきました。

最終日となる8月1日（土）は、飲料メーカーによる企業説明会をはさんで、4名の講師を招いての仕事研究講演会が開催されました。インテリアデザイナーの河合優吉氏、本学の卒業生で3DCG制作会社社長の原かおり氏、マガジンハウスで『anan』の編集に20年以上携わり、本学大学院非常勤講師を務める及川卓也氏、さらに、フルCGアニメーション「カエルマン」や著書「バカドリル」などで人気を集めるアーティストのタナカカツキ氏らによって、実践的なお話をいただきました。プロフェッショナルの現場で日々仕事をクリエイトしている方々の話を間近で聞いて、参加者は仕事をすることの核心部分を考えることができたのではないでしょうか。

カルロス・ゴンザレス教授と鈴木清文氏

メキシコ・日本エイズ撲滅キャンペーンポスター展

特別講演会

ASA GO
■呉　亜沙 氏／アーティスト

本学洋画専攻を卒業した呉さんは、2005年には文化庁の留学制度に選ばれ１年間ニューヨークに留学しています。現在も韓国や台湾などで数多くの展覧会を開くなど、国内外にわたり実践的な活動をしているその体験談からは、アートを学ぶことの大切さが伝わってきました。

「やりたいことをやって生きる道を選んだ」

◆アートを学ぶことの楽しみ

女子美の在学中は、将来自分が作家になることは考えていませんでした。その結果大学院への進学を選択しました。大学院の１年目はまだ何をしていいかわかりませんでした。しばらくして、平面とうさぎを組み合わせたインスタレーションが自分にしっくりしてきました。それからコンクールに挑戦したり、グループ展に参加するなど積極的に活動するようになり、だんだんと作家になりたいという思いが強くなったのです。

今は若手のアーティストのための発表の場がいろいろありますが、たまに悪い人も

いるので、みなさんには気をつけてほしいですね。メディアに出ている日本のアートマーケットの話は、ちょっとオーバーなような気がしています。自分が出会った人とか、体験したことのほうが確実だと思います。人それぞれなので、絶対にこうでなければならない、ということはありません。美大に入ってアートを学ぶことはとても役立つことですから、その楽しみを忘れないでほしいですね。どんな分野に進んでも、楽しいことのポイントは応用がききます。

◆自分の中の自由さのために

私は常に目標や夢がないとどうしていいかわからなくなってしまうところがあります。NYから帰ってきて、ちょっと燃え尽きて真っ白になってしまった時もありました。でも作家活動は続けることが一番大切。今はおばあちゃんになっても作家を生涯続けることが目標です。

私は自分の作品を通じて、自分と他者のかかわりを表現したいと思っています。社会の中での自分の居場所を表現したいという思いもありました。油絵、立体、インスタレーション、映像と、さまざまな手法を用いるのは、自分の中の自由さのためにやっていることだと思います。最近は府中市美術館で子どもたちと“あなたの想像の動物を作ってみよう”というワークショップを行いとても刺激を受けました。

◆“考える”ことを多くする仕事

人からはよく華やかそうに思われますが、それは個展が開催されている期間だけのことです。大体は引きこもった孤独な作業の連続で、自分との戦いでもあります。学生時代はアトリエに行けば仲間と会えましたが、卒業すると自分の作品に関して人と話をする機会も少なくなるから寂しいですね。経済的にも大変厳しく、切り詰めて生活しています。でもそういうことを考えすぎたら作家にはなれないと思います。どこか楽観的になれたほうがいいですね。私の場合はやりたいことをやって生きる道を選んだのだから、と思っています。

自分の中にあるものを表現することは嬉しいものです。自分にとって意味のある行為をしているという喜びはすばらしいもの。作家活動や表現する仕事は生きていることの充実感にもつながると思います。アーティストは“考える”ことを多くする仕事です。世の中の物事の正否ではなく、どう考えるかを伝えることが作家の仕事だと思います。私はこういう考え方をしています、とちょっと恥ずかしいけれど作品を通じて伝えることが自分の仕事なのです。

「樹海」 145.5 x 291 cm oil on canvas 2009

呉 亜沙 氏

2001年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻卒。03年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了。05年文化庁新進芸術家海外留学制度で渡米。帰国後も国内外にわたり展覧会を開催するなど活動している。

YUKICHI KAWAI

■河合優吉 氏／インテリアデザイナー

「行動・継続。諦めなければ道は開ける。自らの考えを世に問う面白味」

27歳の時にインテリアデザイナーを目指した河合さんは、2003年にデザイン事務所を設立、現在東京とマレーシアに事務所を構え世界を舞台に活躍中です。ご多忙の中、講演会終了後も学生の質問に真摯に答えている姿に、一流の仕事人の生き方が伝わってきました。

河合さんが法学部を卒業するも、デザインに転身した理由は、死生観にあると言います。

「先に就職した友人たちの話を聞くと男はみんな会社自慢ばかり。その中でインテリアデザイン事務所で働いている女性の同級生が、「給料は安く、休みもなく、朝行くとスタッフが床に寝てるのよ～」と、言う苦労話を、さも楽しげに語ってくれて、寝る間も惜しむほどの仕事とは、どんなものか見てみたくなった。」そうです。

河合さんは、何を一生の仕事にすべきか悩む中で、死ぬ前に「楽しい人生だったなぁ！」と振り返られるようになりたいと思い、そして、これなら毎日楽しめる！と、感じられる仕事を探し続けたそうです。

「それでどうやったらインテリアデザイナーになれるのかを聞いたら、桑沢にでも行けば？と言われて、すぐに夜間部を受けて入学したんです。とにかく学校でもその後に入った事務所でも楽しくて仕方がなかった。今でもそうですが、寝るのがもったいないくらい楽しかったんです」

自分の会社を設立し、仕事も高く評価されている今、“河合優吉のデザイン”と、自らの名前で勝負することの手応えは、何よりも同じクライアントから2件目の仕事を発注される時だと言います。

「海外の方から、設計料はもちろんのこと、飛行機代もホテル代も払うから、また来てやってほしい、と言われるとすごく嬉しい

河合優吉 氏

慶應義塾大学法学部卒。桑沢デザイン研究所 SD科卒。著名デザイン事務所を経て2003年、デザインスピリッツを設立し、世界を舞台に活躍中。05年マレーシアインテリアデザイン協会、金・銀賞。09年 JCD銀賞など受賞多数。

です。世界の一角に自分の仕事を待っていてくれる人がいるという実感は最高です」

河合さんのマレーシア事務所では、女子美の短大の卒業生が働いています。

「彼女には22歳、入社2年目にして150坪のレストラン、200坪のディスコ、250坪のシアター、3物件を同時に任せています。自分の父親くらいの歳の人達とやりあって、頑張っています。女の人のほうがコミュニケーション力が高いですね。仕事って合気道みたいなところがあって、女の人は相手の力を使うのがうまいので、インテリアデザインの仕事には向いていると思います」

「とにかく皆さんに言いたいのは、行動に移すこと！続けること！です。私は修行中、師匠に、ずっと、おまえはセンスない、デザイナー辞めた方が良いと、言われ続けていました。しかし、こんなに楽しいこと、辞められっかよ！と、心の中で反目し、諦めずに、とにかく、とにかく、今も、やり続けています。

今まで、自分のしてきたことを振返ってみると、色やカタチが綺麗だとか、デザインがカッコ良いとか言うことは、実は二の次で、「自らの考え方、自分のデザイン」を、世の中の人達に問うてみて、「自分の考え方」を世の中の人達に認められること、つまり、ビジネスとして“当てる”ことがクリエイターとしての面白みなのではないかと、感じ始めています。」

KAORI HARA
■原かおり 氏／プロデューサー

「10年後に自分はどうなっていたいのか？」

現在、3DCGの会社を経営している原さんは自分の仕事について、コンピュータの中で映画監督になることだと言います。今や3DCGは、ゲームや映画、広告、テレビの番組制作などの映像分野で欠かすことのできない技術です。

「現場ではCGの知識よりも美的なセンスが重要で、そこにはデッサン力が求められます。この分野はいつも勉強していないと置いていかれます。その意識が大切なんです。だから、ボーっと遊んでいないで、進んで美術館や映画に行って芸のこやしにすることが大切です」

就職において最も大切なことは、まずは会社に入ること。それには人と同じことをやっていてはだめだと言います。自分は何をやりたかったのかをもう一度思いおこしてみる。そして、何でも親に相談せず、自分で決断することが大事なのです。

「女子美の学生は、無難にまとめすぎていると思います。自分のカラを破ることも重要です。教授の印象なんかを気にしていてはだめ。とにかく何でもすごい作品をつくってみること。周りを蹴落として入るくらい、必死になって自分をアピールしてください！」

原 かおり氏
1999年女子美術大学芸術学部デザイン科造形計画専攻卒。04年、株式会社ビーンポッド設立。プロデュース作品に『真・三国無双3』、イベント映像『新鬼武者』、実機イベント『デッドライジング』など、多数制作している。

KATSUKI TANAKA
■タナカカツキ 氏／アーティスト

「絵とアイデアで仕事をしたい」

タナカカツキさんは、絵を描いてものを考えること、それでできる仕事はないかということを常に追いかけているそうです。今の時代の学生は、不安をあおられているのではないかという危惧を感じながらも、実はイラスト、アイコン製作、携帯コンテンツ、DVDなど絵を使う仕事は昔よりもたくさんあるのだと言います。自分でプロモーションする方法もあるし、発表の場はむしろ豊富にあると言うタナカ氏。彼が感じている活躍しているクリエイターの共通点は、「誰からも頼まれてないのに、すごい量の作品をつくっている」ということ。自らも依頼がなくても常日頃いろいろなものを描いておいて、仕事の話が来た時に、新しいタイプの作品も一緒に見てもらうそうです。

「“内にこもりながら、開く”ということをやってほしいと思います。同じ匂いのする人とはどんどんつながって、作品をみせて話をすること。友達がおもしろいって言ってくれたら、必ず世に出るチャンスはあると思います。今の時代、才能は世に埋もれない、必ず見つかってしまうんです」

タナカ カツキ氏
京都精華大学美術学部ビジュアルデザイン学科（現デザイン学部）卒。在学中の85年に漫画家でデビュー。劇団主宰、放送作家なども経験し、94年の『カエルマン』制作を機に映像作品も発表。著書に『バカドリル』など、映像作品集は『タナカタナ夫のDVD』などがある。

TAKUYA OIKAWA
■及川卓也 氏／出版プロデューサー

「美大生は新しいメディアをつくれる貴重な存在です」

本学大学院非常勤講師の及川卓也氏は、雑誌ビジネスの厳しい環境をふまえ、新しいシステムへの転換の可能性についてお話をされました。

「私は自分のやりたいことをいろんな制度とかハードルを乗り越えてやってきました。どんなジャンルでも最初から思い通りにはなりません。やりながら自分のやりたいところに辿り着くことが大切です。自分がやりたくないことをいかに自分の糧にできるか、を考えてほしい。その点、美大で勉強している人たちは、新しいメディアをつくることができる貴重な存在だと思います」

及川 卓也 氏
株式会社マガジンハウスカスタム出版部部長代理として新しいビジネスモデル開発を担当している。anan編集部に20年間在籍。連載企画として豊川悦司「LOVE LETTER」などを制作。『%（パーセンテージ）木村拓哉写真集』を出版。06年より女子美術大学大学院非常勤講師。

Topics 3 第10回 美術教育フォーラム2009開催

今年で第10回目を迎えた「美術教育フォーラム」は、8月5日（水）に「鑑賞教育が育てる感性と知」というテーマで、国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議室で開催されました。小・中・高等学校の図画工作・美術科担当の教員や教員志望者など例年より100名近く多い276名の参加があり大盛況でした。

主催者代表として小倉芸術学部長の挨拶があった後、第1部は教職課程 前田基成教授より、「鑑賞教育で育む子どもの心 ―臨床心理学の視点からみた鑑賞教育」と題した基調講演が行われました。午後からの第2部では、パネリストとして美術館や教育現場で鑑賞教育を研究・実践されている方々をお招きし、今回のテーマに即した事例発表がありました。続いて各パネリストのコメント、補足説明などが行われ盛況のうちに閉会しました。なお引き続き、講師、パネリストを囲んだ懇親会が行われました。

●基調講演講師　前田基成(本学芸術学部 教授)
●パネルディスカッション　パネリスト
奥村高明(国立教育政策研究所教育課程センター研究開発部 教育課程調査官)
福嶋麻美(東京都中野区立上鷺宮小学校 教諭)
齋藤守彦(宮城県美術館普及部 主任主査)
吉野朋美(千葉県一宮町立一宮中学校 教諭)
原田敬一(相模原市立大野南中学校 教諭)
島袋和美(静岡県立沼津西高等学校 教諭)
コーディネーター
山田朋子(本学短期大学部 准教授)
●後援　東京都教育委員会
●参加者276名の内訳：小学校教諭32名、中学校教諭100名、高校教諭38名、特別支援学校教諭13名、大学生20名、本学教職員42名、その他31名

Topics 4 注染B反がビーチマットとして「逗子ビーチクリーン」で活躍

「注染」という独特の染色法で染める手拭や浴衣。これらがわずかな染めムラや織ムラによって商品にならなかったものはB反と呼ばれます。本学では2008年よりこのB反を使って、学生のアイデアから新たな布製品を生み出す「注染B反プロジェクト」に取り組んでいます。このたびこのプロジェクトに有志参加している工芸学科の学生を中心とした5学科の学生計15名がB反を縫い合わせてビーチマットを作成し、NPO法人GoodDayが実施する「逗子ビーチクリーン」で使用してもらいました。NPO法人GoodDayは7月～8月の毎週土曜日に逗子海岸のゴミ拾いをおこなっており、注染ビーチマットはゴミ拾い時の荷物の置き場として活躍しました。これまで処分されてきたB反から作られ、繰り返し使える、見た目にもきれいな布地はビーチで大いに重宝されており、現在本学の事業会社、(株）アイシスにて商品化に向けて準備を進めています。「注染B反プロジェクト」は「素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信」と題した本学の取り組みの一環で、文部科学省によって2008年度に「質の高い大学教育推進プログラム」（教育GP）にも採択されています。

Topics 5 県立観音崎公園「トイレアートプロジェクト2009」

2007、2008年の『トイレアートコンテスト』による作品は、今までの、暗く・汚い印象の強かったトイレ空間を、とても華やかに楽しく演出してくれると、訪れる利用者から大変高い評価を得ています。引き続き、2009年も2月に、神奈川県立観音崎公園の指定管理者である「横浜緑地・西武造園グループ」主催により行われ、デザイン学科現4年生の田口こずえさんの作品が選出され、3月末に設置、現在一般公開されています。

今回は横須賀美術館近くの「三軒家トイレ」の内部空間に相応しいデザインで制作されました。題名は『adventure』です。「観音崎公園内の『地層』からイメージし、その地下に広がる、未知の地底世界を「冒険」する“楽しさ”を、曲げ合板と封入樹脂により制作・表現しました。たくさんの子供たちがその楽しさを感じてくれたら嬉しいです。」と、制作者の田口さんは話します。観音崎公園の主テーマ「でかける人を、ほほえむ人へ」のように、また明るく楽しいトイレが増えたと、利用者や公園関係者からも、大変喜ばれています。

（芸術学部 デザイン学科教授　田村俊明）

Lecture ・3 美術監督 桑島十和子さん特別講演会

2008年に映画「パコと魔法の絵本」の美術監督として第32回日本アカデミー賞で最優秀美術賞を受賞された桑島十和子さん（短期大学部造形科絵画教室卒業）。キャリア支援センターでは5月16日に桑島さんの特別講演会を開催し、美術監督のお仕事について学生が直接お話を聞くことのできる機会をつくりました。桑島さんはなんと三日貫徹（！）してお仕事をされている最中に時間を削って駆けつけてくださいました。

―桑島さんは高校から女子美の付属だったそうですが、なぜ女子美を選ばれたのでしょうか。

桑島：絵が好きだったのと、お話に沿って絵を描くのが好きだったので、将来は挿絵とか絵本を描いたらいいのかなと思っていました。中学生の時に映画を見始めて、その役者さんの奥にあるものが、お話に沿って進んでいるのに気が付いて、「これではないか！」と。でもこの分野の入り口もわからなかったので、とりあえず絵を描いていれば何か見つかるはずだと思って、女子美に付属から入学しました。

―今のお仕事をされるきっかけというのは、女子美の短大で映画の制作スタッフのアルバイト募集のチラシを見つけたことだったとか。当時はどのような仕事を？

桑島：製作部っていうみんなのお世話係みたいな仕事が、映画やコマーシャルやプロモーションビデオの製作にあるんですが、製作部の中でも一番下っ端で、お茶を配ったり、赤色灯を持って道路で交通整理をしたり、そういう仕事をしていました。その現場には必ず美術をやっている人がいるはずだと思って無理矢理入れてもらいました。

―現在の会社に入社をされるまでの経緯や、その間に影響を受けた方などは？

桑島：その映画のアルバイトに行った時に会ったのが、師匠だったんです。誕生日がたまたま一緒で、「働いてみる？」みたいな話になって「あ、ぜひやります」と。

―CMも多く手掛けられていますよね。25歳の頃に早くも任されたと伺いましたが？

桑島：中島哲也監督とうちの師匠がもともとはずっと一緒に仕事をしていて、私は師匠の助手についていたんですが、ある日、たまたまその時のロケに美術が行けなくなって。師匠を連れていくと高いわけです、コスト的に。私はまだ助手なので安いじゃないですか。「行ったら必ず役に立つから連れていってくれ」って言ったら、その場でプロデューサーに電話してくれて、連れていってくれて。それがきっかけで中島監督から直接CMの仕事をもらうことができました。「じゃあおまえ、1人で今度やってみるか？」みたいな。

―『下妻物語』の後に、中島監督と仕事をされていますが、中島監督が作品づくりをする時の特徴や魅力みたいなものは？

桑島：台本には1行で書いてあるシーンでも、その表現の仕方がすごいんです。例えば、『パコと魔法の絵本』の台本で「大貫が病室で座っている」みたいなことが書いてあるんですけど、そこには例えば窓からの光があって、その光が動いていて、大貫の感情を表しているとか。カットごとにつないでいくところの、窓のサイズと窓のデザインが、患者さんの部屋と病院が同じになっていてシンクロしているとか。それは台本には何も書いていないんですよ。そういうことが盛りだくさんです。やりたいことがいっぱいあって、それがいつも面白くて。だから、私もスタッフもそれに刺激されて。その考えに負けたくないから、もっと面白いものを持っていこうと思ったりするんじゃないでしょうか。

―桑島さんご自身も、遊びやこだわりを入れたポイントはあるんですか。

桑島：『パコと魔法の絵本』ではあまりないですね。『嫌われ松子の一生』のときは結構入れたんですけど、ひな祭りも、別にひな祭りなんて台本には書いていなくて、私が勝手にひな祭りにしているだけなんですよ。松子の実家の襖に木の絵が描いてあるんですが、それがあの家の心情を表していて。例えば青く塗ったり、紅葉していたり。松子が折り紙が好きというのも、私が勝手に考えたんですが。

―学生から質問を受けたいと思います。

学生：美術の仕事にはどのようなものがありますか。

桑島：まずデザイナーっていうのが私の仕事です。美術監督がいて、その下に美術助手がいて、その美術助手は私のお手伝いをしてくれます。映画の場合、私がデザインしたものの図面を描いたり、その下の人たちの進行をしたりする助手さんっていうのが何人か付きます。その後に大道具さんがいます。大道具さんは、基本的に木工で作る人です。そしてベニヤとか柱とか、木で作ったものを塗る、塗り屋というのがいて。あと、植木をやったりお庭を造る造園部、タイル屋さん、コンクリートをやる左官屋さん。あと、背景屋さん、鉄骨屋さん。そして、装飾があって。装飾部の中には、持ち道具という部署の人がいて、役者さんが持っている道具を用意する。食べ物だったり、カバンとか靴、衣装、服以外のもの。最近はスタイリストさんがいるからスタイリストさんがそれをやることもある。あとは仕掛けとかいうと、SFXをやる人たちがいるんですよ。風を吹かせたりとか、雨屋さんがいて、雨を降らせたりとか。もういろんな担当がいっぱいいるんですね。それを動かしていくのが私の仕事なんですよね。

―最後に学生に向けて一言お願いします。

桑島：私は本当に普通の人で、みんなの前で話ができる立場でも何でもないので、恐縮なんですけど。みんな自分がやりたいことを探せばいいんじゃないかな。何か好きなことがあったら、1回やってみればいいと思います。失敗は私もするので、みんなもどんどん失敗すればいいのさ、と思う。なんかみんながうらやましいです。私も頑張ります。

Topics 6 「女子美短大ゴッホクラブ」結成

6月12日～28日、劇作家・三好十郎のゴッホの生涯を描いた演劇『炎の人～ゴッホ小伝』が上演されました。演出家の方との話し合いにより、この舞台で使用される「ひまわり」の絵を短期大学部の学生が描くことに。模写する学生を募集し、『女子美短大ゴッホクラブ』を結成しました。劇中、「ひまわり」にナイフを入れて切るという演出があり、公演回数分の絵が必要となるため、20枚にもおよぶ「ひまわり」を描画しました。

美術コース吉武研司教授が総監督として見守る中、作品は2月17日～2月26日の春休み中に制作され、模写の制作指導から講評・感想発表会を行い、参加学生にとって、大変貴重な経験になりました。

Topics 7 「座・高円寺」オープニングイベントに参加

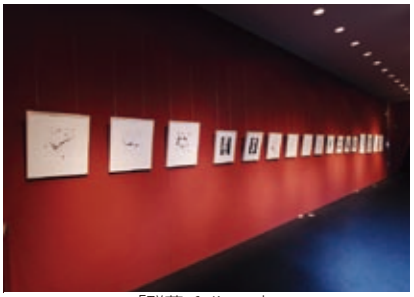
5月1日にオープンした杉並区立杉並芸術会館「座・高円寺」のこけら落としに、「旅する絵本カーニバル＋びっくり大道芸」と題したイベントが行われました。会場には多くの参加者が集まり、テーマにそって集められた1000冊にもおよぶ絵本と、絵本の中から出てきたような大道芸を楽しむ中、女子美生が会場案内や子どもたちに対して絵本の読み聞かせなどを行いました。学生にとっては、豊富な絵本資料と多くの読み手の中で活動することで、絵本制作の貴重な体験となりました。

また、5月2日～3日、高円寺の街を舞台に行われた「高円寺びっくり大道芸2009」の催しの一つとして、高円寺びっくり大道芸実行委員会より依頼を受け、女子美の学生有志がフェイスペイントを担当しました。2日間にわたり、訪れた参加者に対してフェイスペイントを行い、多くの子どもたちに好評を得ました。

座・高円寺「Gallery　アソビバ」では、7月13日～8月2日、短期大学部専攻科工芸デザインコース（染織）の学生13名による作品「あわおどり」と、短期大学部デザインコース　横山純子助教の作品「群葉：foliage」が展示されました。

「あわおどり」

会場の様子


「群葉：foliage」

Topics 8 JOSHIBI倶楽部トークinギャラリー　申込受付中

“現在美術進行形”と銘打ち、4回にわたり現代美術や伝統美術に対する新たな見方を提供しながら、アートの魅力を数倍にも楽しむ方法をお教えする講演会です。

【第1回】

「ヴェネチア通信　ー世界のアートシーンは今ー」

日時：9月19日（土）　15:00～16:30
スピーカー：南嶌宏（本学教授・アートプロデューサー）

本年度ヴェネチア・ビエンナーレの日本館コミッショナーを務めた南嶌宏教授による、同ビエンナーレ活動報告と、世界のアートシーンの現状と課題についてお話します。

【第2回】

「現代アート考　ーアートという実践ー」

日時：10月17日（土）　15:00～16:30
スピーカー：杉田敦（本学教授・美術批評家）

制作や鑑賞だけでなく、プロジェクトや批評も一つの実践として捉えられている今日的アートの状況を、越後妻有トリエンナーレなど実際の活動の様子を交えてお話します。

【第3回】

「彫刻今昔　ー仏像からキャラクターまでー」

日時：11月14日（土）　15:00～16:30
スピーカー：北澤憲昭（本学大学院教授・美術評論家）

近年、若者からも注目を集める仏像や、近年の銅像ブーム、さらに現代の“ゆるキャラ”など、今も昔も日本美術の一翼を担ってきた彫刻的世界の魅力を探ります。

【第4回】

「日本美術再発見　ー現代の視点からー」

日時：12月5日（土）　15:00～16:30
スピーカー：未定

近年、関心が高まる日本の伝統美術。「飾り」や「奇想」「カワイイ」など、「わび」「さび」「秋草の美学」といった従来の美意識の枠では捉えきれない日本美術の新たな魅力を探ります。

■会場
Galerie412
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前4丁目12番10号
表参道ヒルズ同潤館302

■定員
各回35名（先着順・定員になり次第締切）

参加をご希望の方は、女子美術大学公式HPまたは女子美入試センターまでお電話でご予約の上、ご参加ください。
女子美入試センター：042-778-6123
女子美術大学 HP：http://www.joshibi.ac.jp/

Message 退職教員からのメッセージ

鴎　剛
shigi gou
芸術学部 絵画学科 洋画専攻 教授

女子美のことを良く“竜宮城みたいだった”という先生や卒業生がいます。確かに、私も助けた亀に連れられて来た訳ではありませんが、公募採用以来の12年間は本当に月日のたつのも忘れていました！玉手箱を貰う前に、お爺さんに成ってしまい残念ですが、乙姫様や鯛や鮃の舞い踊りを見るように、多芸・多彩な先生方や学生達と出会えたことは、この上も無く幸せな人生の宝物・玉手箱を戴いたものだと深く感謝しています。今後、ますます女子美竜宮城が輝きを増し発展することを心よりお祈り申し上げます。

木下　道子
kinoshita michiko
短期大学部 造形学科 デザインコース教授

豊かな時間を共にした女子美の日々が思い出されます。1900年より絶える事ない<女子美 DNA >今後も変わることなく<女子美>であり続けてほしい。そんな私のお気に入りの場所が六本木の大きなビルの一角にあります。ストリートファニチャーのひとつ「雨に消える椅子」に座り、目線の先にある「カウンター・ヴォイド」のガラススクリーンに浮かぶデジタル数字が点滅しているのを眺めていると、心の中まで透通る様な瞬間を味わう事ができます。涼しげな風が体を通り過ぎ、自然と一体になった様な感覚を覚え、雑踏の中の一瞬の静けさを楽しんでいます。

Topics 9 相模原公園に彫刻のプロムナード誕生

女子美から程近い県立相模原公園に彫刻プロムナードをつくる試みが進んでいます。公園内の小道に彫刻作品を設置することで市民の日常生活とアートとの接点を作り出そうとするもので、芸術学部立体アート学科の平戸貢児教授とそのゼミ生が中心となって取り組んでいます。彫刻は本学卒業生の手によるもので、この取組みは、2009年度の大学院 GPにも選出されました。2010年度までに12体の彫刻作品を設置する予定で、今年の6月に彫刻作品の基礎部分を完成させ、7月には全体の半数の6体の彫刻作品が設置されました。

また、7月5日には公園内の花壇、大型温室のグリーンハウスをリニューアルしたことに合わせて「県立相模原公園リニューアルイベント」がおこなわれ、公園のキャラクター・ロゴマークを制作したメディアアート学科の学生と教授や彫刻の設置に関わった学生と教授が出席しました。

2008年度卒 広川育子さんの「connection」

Topics 10 2009 アジア・パラアート TOKYO

「東京2009アジアユースパラゲーム」を契機に、障害者アートのすばらしさを広く多くの人に知ってもらおうと開催された「2009アジア・パラアート TOKYO 」（主催：財団法人日本チャリティ協会、「2009アジア・パラアート TOKYO」実行委員会）の展覧会シンボルマーク、ポスター、カタログ制作に協力しました。

展覧会は、9月11日～16日、西武百貨店池袋本店西武ギャラリーで行われ、今後、本学の相模原・杉並の両キャンパスでも展示を予定しています。

Topics 11 原宿クエストに学生作品展示

1988年にオープンし、今年で21年目を迎える原宿クエストでは、都内を中心とした美術大学、専門学校と協力し、1階ピロティの柱巻き装飾の公募を実施。最優秀作品は、実際に原宿クエスト1階ピロティに展示されます。

公募は季節に合わせて「夏」、「秋」、「冬」、「卒業・旅立ち」のテーマで行われ、第1回目となるテーマ「夏」では、本学デザイン学科3年生の学生6名（池田静、阿部美幸、石原佳世、大熊千紗、柿塚恵、増川友梨）の装飾案が選出さました。作品タイトルは「水柱」。氷が溶け出し、水滴となり地面を潤し、蒸発する様子を表現した作品は、実際に展示が行われた7月31日～8月31日の間、暑い原宿に涼感を誘い、道行く人の目を奪いました。

JAM・女子美アートミュージアム展覧会情報

JAM展覧会報告

CaptionCaption

芸術学科4年生プロデュースによる本展では、作品とキャプション（作品解説板）の関係について考えることをテーマに、展示作品にはキャプションを一切つけず、床には1000枚以上のキャプションを敷き詰めるという、実験的な試みがなされました。会期中には、学内教員によるキャプションについてのトークショー、市内の合唱サークル「四季の会」によるコンサート、新入生や小学生に向けてのワークショップなどのイベントも、精力的に開催されました。（2009年4月8日～5月6日）

やっぱり…ファッション造形。アートからデザインまで

同窓会の企画による本展では、歴史資料から近年の卒業制作までの展示を通して、女子美における服飾教育、ファッション造形の歩みを紹介しました。会期中には、JAMサポートスタッフの学生がファシリテーターとなり、視覚に障害を持った人と一緒に作品を鑑賞するプログラム「さわってみよう。はなしてみよう。」を実施しました。いつもと違った鑑賞を通して、参加者にとっても学生にとっても、多くの発見があったようでした。

（2009年5月13日～6月14日）

on the earth project　つくる,こわす,生きる.ダンボールタウンで考えた.

相模原市立双葉小学校とのコラボレーションを核とした女子美術大学の学生、大学院生によるプロジェクト。オープニングパーティーには、昨秋のワークショップでダンボールハウスを作った小学生たちも出席して、にぎやかで楽しい時間となりました。

（2009年6月26日～8月2日）

JAM展覧会予告

平成21年度退職教員記念展

本年度定年退職する稲田美乃里（絵画学科洋画専攻教授）、佐々木宏子（短期大学部造形学科美術コース教授）、仙石克己（芸術学科教授）による展覧会。

（2009年9月16日～10月25日）

ガレリアニケ展覧会報告

女子美ガレリアニケとは：若手女性作家を中心に、女性をテーマとして作家や作品などを取り上げるだけでなく、教員をはじめ芸術学部・短期大学部、同窓生から公募した企画を中心に、展覧会、パフォーマンス、ワークショップ、トークショーなどを開催しています。

松川ビジョンの世界とその継承者たち

付属高等学校・中学校美術科教諭 松本ヒロ子企画

故・松川烝二（元教授）のデザイン思想や教授法を継承する「松川ビジョン研究会」のメンバー7名による展覧会。

（2009年4月6日～4月18日）

植物の育つころ　―岩崎裕子展―

短期大学部造形学科教授 伊勢克也企画

岩崎裕子（絵画学科日本画専攻卒）による展覧会。（2009年4月21日～5月15日）

mius exhibition 木内美羽作品展

短期大学部造形学科教授 伊勢克也企画

木内美羽（メディアアート学科卒）による写真展。（2009年5月22日～6月6日）

裏がわ

短期大学部造形学科教授 伊勢克也企画

坂巻弓華（短期大学部デザインコース卒）による墨絵の裏がわ展。

（2009年6月10日～27日）

Kazumi's Stitching World 名づけえぬもの　岡崎和美個展

短期大学部造形学科教授 伊勢克也企画

岡崎和美（短期大学部デザインコースクラフトデザイン助教）による刺繍の展覧会。

（2009年7月3日～7月20日）

keep distance　羽山まり子

ACPの企画による、羽山まり子（洋画領域修士課程在籍）の展覧会。

（2009年7月24日～8月7日）

女・装　―美寿羽楓・山田はるか展―

短期大学部造形学科教授 伊勢克也企画

アーティスト・美寿羽楓と山田はるかによる「女・装展」。「女を装う」、「女が装う」というアプローチで女装、男装写真を展示。

（2009年8月22日～9月5日）

銀座gallery女子美展覧会報告

Textile design・Surface design 山本清

山本　清（大学院客員教授）によるテキスタイルの展覧会

（2009年4月7日～4月28日）

the Margin

後藤冨美子（非常勤講師）による写真展。

（2009年5月18日～6月13日）

開廊一周年記念　継岡リツ展

6月より付属高等学校・中学校校長に就任した継岡リツの作品展。

（2009年6月25日～8月5日）

それぞれのいま　大谷佳子・加藤尚子展

大谷佳子、加藤尚子（工芸学科ガラスコース非常勤講師）による作品展。

（2004年8月20日～9月19日）

NEWS 2 佐野学長 高山村調印式に出席

長野県高山村、須高ケーブルテレビ株式会社、女子美術大学は2006年4月より高山村を拠点とした地域文化創生事業としてアートやデザインを生かした地域づくりを行ってきました。

それぞれの特徴と役割をうまく生かした産学官連携事業は3年間にわたり素晴らしい成果を上げ、2009年より引き続き、3者による地域文化創生事業の継続に合意しました。

それに基づき2009年4月24日(金)、長野県上高井郡高山村役場内で高山村より久保田村長、須高ケーブルテレビ株式会社より丸山代表取締役社長、そして本学より佐野ぬい学長が出席し、多数のメディアの取材の中、地域文化創生事業の調印式を行いました。

(写真左から)久保田高山村長、佐野学長、丸山須高ケーブルテレビ㈱社長

Topics 12 「ヴァンジ彫刻庭園美術館」で特別講義を実施

5月27日、芸術学部立体アート学科の客員教授、ジュリアーノ・ヴァンジ氏の特別講義が「ヴァンジ彫刻庭園美術館」(静岡県)で実施されました。参加したのは芸術学部立体アート学科の1年生から卒業生まで、総勢80名。ヴァンジ教授が大きな石彫の新作を設置されるところに皆でおしかけて、生の設置の勉強をしてきました。作家の作品への思いや情熱や厳しさや、色々なことが伝わってきました。

当日は天候にも恵まれ、参加者はメモを片手に館内と庭園を回り、夢のような時間を過ごしました。

(芸術学部 立体アート学科)

Topics 13 女子美術大学和田寮 閉寮

杉並キャンパス近く、「女子美術大学和田寮」が閉寮しました。

4月11日に最後の寮生を送り出した後、4月26日に和田寮の最後の学生と学生会館の学生を交えて、和田寮にて懇親バーベキュー大会を実施し、この日が名実ともに和田寮最後の日となりました。

1961年の設立から48年間、多くの女子美生が生活し、多くの卒業生が巣立った和田寮は、学生に閉寮を惜しまれながら、その長い歴史に幕を下ろしました。

Topics 14 公募展他 受賞者紹介

ターナーアクリルアワード2008

入選

福島 さやか(大学院美術研究科修士課程 立体芸術領域　2年)

トーキョーワンダーウォール公募 2009

トーキョーワンダーウォール賞

大小島 真木(大学院美術研究科修士課程 美術専攻洋画研究領域　1年)

第10回境内アート小布施　選抜展

実行委員会推薦賞

松井 香楠子(大学院美術研究科修士課程 立体芸術領域　1年)

J:COM「さがまちバンバン」

ケーブルテレビ J:COMにて放映中の大学生による地域情報番組「さがまちバンバン」内で放映された生徒映像作品の中で最も優れた作品、最も素晴らしかった女優に贈られる賞です。

○さがまちバンバン OF THE YEAR

○主演女優賞

望月 彩貴、安井 梢、室谷 映里子、松本 悠美子、福島 章子、松崎 あゆみ

(芸術学部メディアアート学科　4年)

広報誌「女子美」の定期購読をご希望の方には毎号無料でお送りしております。ご希望される場合は、お送り先を広報入試課まで連絡ください。
また、広報入試課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報入試課》 TEL. 042-778-6123
FAX. 042-778-6692
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

URL http：//www.joshibi.ac.jp

発　　行　学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8
企画・編集　企画部 広報入試課
制作・印刷　株式會社 日相印刷
監　　修　山本　吉男
発 行 日　2009年9月18日